

林大だより



第70号 平成27年10月11日

長野県林業大学校翌協会



2 学年 オーストリア研修



1 学年 屋久島研修



2 学年 保健休養学（林業総合センター）

2015 オーストリア研修苦労話

2学年担任 吉川 達也

7月5日(日)から13日(月)までの9日間に2年生20人を引率してオーストリア研修へ行ってきました。現地では天気にも恵まれ、「担任の普段の行いがよいくらなる」と学生20名に、そーい聞かせながらの研修でした。(笑) その研修中での苦労話を少し紹介します。

研修期間中、ホイーマーダー氏、ハーガー氏、そして通訳の青木氏には大変お世話になりました。この3名の方々には研修前からお世話になっており、青木氏とのメールのやり取りを通じて研修内容を詰める中で、青木氏が現地の両氏にドイツ語で伝え、日本語に換えてメールしてもらう。こちらからメールしても当然3名の方は仕事なので、時差もあり、直ぐには返信が来ません。余裕をみて4月上旬からメールを始めましたが、行く直前の3ヶ月間もメールでやりとりしていました。3名の方々の献身的な対応に、頭を深くさげつつ「ダンケシェン」。

現地へ行って大変だったのは、お金の支払い。支払いは現金(ユーロ)が基本で、普段持ち慣れていないせいか、研修のお金を持って歩くのは、緊張の連続でした。青木氏に通訳してもらいながら、支払いをして、何が書いてあるのか判らないけど、領収書(領収書らしきもの)をもらう。(日本の領収書はしっかりしているなと思いました)そして最後に「ダンケシェン」。

今年は、過去の研修ではなかった試みがありました。5時間かけた駅から駅までの電車での移動です。車両の何番から何番までの座席を予約し、各自の大きな荷物を座席の間(荷物も含む)に収める方法でした。乗車したインスブルック駅が通過駅だったので、電車を待ち構えて「それ来た」乗るはずの車両が予定通りの位置に来ない、「それ荷物をガラガラしろ」「それ荷物をバケツリレーして積み込め」、「荷物の次は人が乗り込め」、周りは外国人さんだらけの中で、日本人25人が必死になって乗り込む。全員が席に着いた時には皆ぐったり。だれもが必死だったため、この時の様子を写真に収めておらず、写真や動画でこの大変さを伝えることができず残念です。(写真は乗込み後の写真)

一旦、電車に乗ってしまえば、車窓からはオーストリア独特の風景。そして2駅にひとつはあったのではないかと思うくらい頻繁に見えた製材工場と丸太のはい積み風景。電車の旅ならではのよさがあり「ダンケシェン」。

5時間乗って安心もつかの間。今度はレオーベン駅で降りる時でも、乗る時と同じで、「それ荷物のバケツリレー」、「早く降りろ」、「居ない奴(乗り過ぎた奴)はいないだろうな」、「激しい雨が降っているな」…とドタバタでした。その時の



乗込んで移動中の車内

の雨は局地的な嵐だったそうで、その嵐は大きな爪跡を当地に残していきました。

行く前は、市内観光に行けば必ず数名は時間内に帰ってこないだろうと心配していましたが、さすが皆時間内に帰ってきてくれて安心しました。

今回の研修から林大に帰ってきた時には、林業の先進地で勉強してきたせいか…、いやそれだけでなく、20人が連携を持ちつつ、自分の責任で行動することができる大人に近づいたかなと、ひとまわり大きくなったことを素直に感じました。「ダンケシェン」。

インスブルック市内の象徴的な建築物「金の屋根」の前にて



編集後記

校舎の廊で男女が話し込んでいる。

試験の話?就職の事?何の話をしているのか。詮索は御法度だが気にはなる。

宮本輝の「青が散る」を久しぶりに思い出した。好きな小説の一つだ。

若い登場人物たちが織りなす青春小説。この青春時代に生きる葛藤や慟哭など同感することも多かった。読み方は人それぞれであるが、前向きに生きていこうとするメッセージを感じた。

青春時代は悩み多く、苦しい。学生生活において何を「思い」「考え」「感じ」そして「経験」するかは、人それぞれ。過ぎ去った日がいかに尊いものであるのかは、後になって気づくものだ。

自らが手を挙げ、自らの意思で一步前へ歩みださなければ事は進まない。

学生諸君よ。二年間の林大生活、時には泣いちゃう事もあるけれど、悔いの残らぬよう過ごしてほしい。(T)